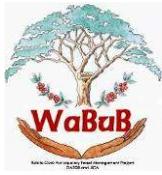


WaBuB PFM News

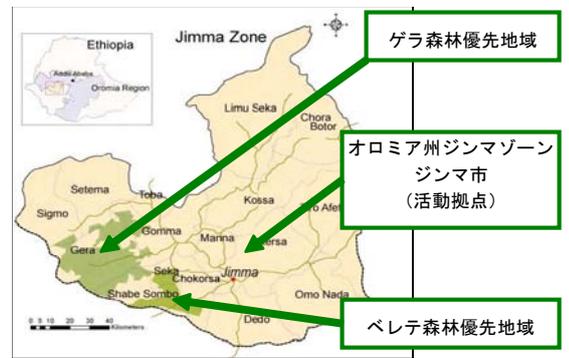
～Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management～



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2008年5月31日発行 (第18号)



計画停電と断水の日々…

ようやくベレテ・ゲラでまとまった雨が降り出すようになったものの、まだ各地は水不足のようです。ほとんどを水力発電に頼っている電力事情もその影響を受け、ジンマだけでなく首都アジスアベバでも計画停電が続いています。ジンマでは最近2日に1度という頻度(計画停電とは言え、当然のように事前の予告は全くない)で、停電は未だ我慢が出来るものの、併発する断水は何とかして欲しいものです。特に、汗だくでフィールドへ行った後の断水には、どっと疲れがでます。ミャンマーのサイクロン被害は顕著な自然災害の例と言えますが、それ以外にもニュースにならない慢性的な被害がいろいろな所で起こっていることを実感させてくれます。森林保全や地球環境を真剣に考える警鐘となればいいのですが…

ベレテ・ゲラ巡業 ～ゲラ森林 ダチョ・ガミナ村の巻～

「ここはゲラのアマゾンだ!」と、ダチョ・ガミナ村のアハメ普及員が誇らしげに見上げる。隣村との境界まで2時間の山道、高木が立ち並び、コーヒーのトンネルを腰をかがめて進む。森林コーヒー大生産地の1つであるガミナ集落で、ようやく WaBuB の組織化作業が始まった。月例の会議にアハメ普及員は全く現れず、今年はもう駄目かと思われた。しかし、つい1週間前に行われた新規採用普及員への WaBuB 研修で、2人の新普及員が訴えた。「これからガミナに戻って、すぐに集落住民との会合(第7号参照)を行う。境界策定のサポートが得られれば、どうにか組織化を1か月以内に終わらせてみせる!」…一発逆転のチャンス到来である。



深い森に囲まれたガミナ集落

アファロ集落から約10キロの山道を登ると、ガミナ集落にたどり着く。世帯数はおよそ150とやや小規模だが、コーヒーの収穫時期には400世帯を超える森林利用者(コーヒーの木を所有する他村の人々)が押し寄せる。集落内の頂から眺めると、見渡す限り森に被われた山々が連なる。よく見ると、小さな農地が点在している。ガミナ集落は居住地が1か所に固まっておらず、森の中に6つの小集落が点在して形成されている。おまけに、すでに居住者はいないものの、乾期の放牧地として利用されている廃村(元小集落)が2か所ある。こうした土地も、森との境界線を明確にして管理がされなければ、今後も農地や放牧地が広がっていくばかりであろう。



後輩に刺激を受け、アハメ普及員も作業に励む

ガミナにたどり着くと、期待通りに普及員達が準備を整えていた。すでに集落の住民への説明を終え、境界画定作業を行う合意とアレンジもできている。頼りない先輩のアハメ普及員も、2人の後輩に急かされるように人集めに奔走している。翌朝から3つのグループに分かれ、作業を開始した。おそろしく健脚な農民と普及員に遅れまいと、道なき森の中を駆け回る。泥道を滑り落ち、刺に手足を引っ掻かれ、時折、「何でこんなことしてんだろう?」と、疑問がわくものの、あまり深く考える余裕はない。目印になる大木にペンキを塗り、GPSで位置を記録する。そしてまた、次の境界を目指す。ひと段落ついて、ぶらりと立ち寄ったお宅で振る舞われる「塩入り森林コーヒー」がうまい。

どうにか普及員や農民とのチームワークによって境界画定を2日間で終え、お茶で簡単に祝杯をあげたのも束の間、さっさと床につく。日本なら温泉で疲れを取りたいところだが、泥だらけの手足をタオルで拭う程度。今夜もまた雨が降り出したかと思うと、稲妻の中にあるような凄まじい雷鳴に包まれる。「森があるから雨が降るのか、雨が降るから森があるのか…」きっと、これも共生なのだろう。ようやく小降りになって眠れるかと思うと、腕や足を何かが這っていくのがわかる。いくら潰しても次々と忍び寄るダニ共だ…。これも生物多様性だ! 共生だ! とあきらめるしかないのかもしれないが、とにかくかゆい。隣で寝言を叫ぶ普及員が羨ましい。共生の精神・生活を忘れた民への体罰なのか!? 森林コーヒーと雷とダニ、そして人々が織りなす小宇宙…、大自然からの教えは奥が深く、まだまだ尽きることはない。



最高のおもてなし、塩入りコーヒーでほっと一息

WaBuB は、現地オロモ語で(地域住民により組織される)森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFMは、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

農民の学校 WFS ～エキスパートを目指して～

ベレテ・ゲラ内で実施中の WFS (WaBuB Field School) は、現時点で55グループあります(約 1500 名の農民が参加)。「農民ファシリテーター」の養成も行い、今後、農民が自身でグループ活動を行い、計画・実施するための組織力を培っていきます。セブンイレブンで例えると、これまで各店(WFSグループ)で中心になって経営(ファシリテート)を行ってきたのが店長(普及員)。今後、この店長が新規出店先での支援を行えるよう、アルバイト店員(農民ファシリテーター)が独り立ちできるようになる必要があります。その移行期が、ちょうど今にあたります。うまく店長が支援出来ればアルバイト店員でも自信を持ち、安心して店を任せることができます。しかし、その支援が適切になされなければ、独り立ちどころか店の存続にも影響してしまいます。さて、実際の各店の状況はいかがでしょうか？

～ベレテ森林ヤンガ・ドグマ村 アドマス普及員の WFS～

ベレテ森林の中でも真面目と言われるアドマス普及員の WFS、楽しみに行ってみると、メンバーの村人が集まってキャベツの植え替え作業をしています。聞いてみると、アドマス普及員はもう来なくなって2週目とのこと。どうなっているのでしょうか？その間、植物の観察・分析といった学習は行われず、農作業のみのようです。訓練を受けたばかりの農民ファシリテーターを責めても、これでは研修を受けたアルバイト店員がいきなり店を任せられたようなもので、名ばかり管理職と訴えられかねません。



農作業だけでは、メンバーの能力向上は限定的

～ゲラ森林カチョ・アンダラチャ村 タファロウ普及員の WFS～

WFS開始当初の11月には、時間通りに来たメンバーは3名のみ。わずか10名ほどで苗畑作りのみを行い、とても長続きしないだろうと懸念していたタファロウ普及員のWFS。プロジェクトスタッフのサポートを得ながら、どうにか続けてきた甲斐があり、ほぼ全員(27名)が時間通りに集まり、農民ファシリテーターの進行の下、観察・分析・発表のカリキュラムがスムーズに進行していきます。タファロウ普及員が時折、段取りの指示やコメントをするのみで、メンバーが自分達で作業分担を決めています。女性が未だ内気で草取り作業に専念している傾向があり、タファロウ普及員にアドバイスをすると、直ぐにグループでまとめるよう指示を出します。各店をまわって、すでに日常化して店長が気付かない点についてアドバイスをし、売上向上(メンバーの能力向上)のサポートをすることも、プロジェクトの重要な役割です。



農民ファシリテーターへの適切な支援が必要

～ゲラ森林グラ・アファロ村 ベティグル普及員の WFS～

ベティグル普及員の WFS では、ちょうど Exchange Visit というイベントが行われていました。他の WFS グループを実際に訪れ、共に観察・分析の作業をしながら、自分達がこれまでに学んできたことと比較をし、経験を共有します。自分達が住むグラ集落

からはるばる2時間を歩いて、アファロ集落にある WFS を訪問しました。到着早々、早速苗畑に行き、共に生育状況の観察をしながら、「何を比較しているの?」「この唐辛子の植え付け間隔は何 cm?」などと、熱心に質問を繰り返します。こうして実際に他店の様子を見た上で、学習に基づいた経験や情報のやりとりがなされます。それらを通して、好奇心ややる気、競争心を刺激し、売上向上や改善につなげることを期待しています。



WFSでの経験を共有し、やる気を刺激する

現在の55グループ、各店の状況は様々です。すでにアルバイト店員に店を任せるともよさそうな所もあれば、未だ店長さえもろくに経営ができていない所もあります。1つの店の売り上げだけを伸ばすことが、プロジェクトの目標ではありません。55の店全てにおいて店長とアルバイト店員が協力して経営を行い、約1500名の顧客(メンバー)全員をエキスパートにするための能力向上をねらいとしています。そのために、どのようなモニタリングや支援が必要か、さらなる工夫を考える時に来ています。

長期専門家赴任 ～よろしくお願ひします!～

業務調整/参加型森林管理専門家として5月12日にエチオピアに赴任しました稲田です。今回初めての長期専門家になります。長期専門家の特典は何と言っても“じっくり”とプロジェクトに取り組めるということでしょうか。この特典を活かしてカウンターパートや住民と口角泡飛ばし、膝を交えて、取っ組みあいながら七転八倒して地域の発展を考えていきたいと思ひます。

1999年からアフリカの竹について研究しており、対象地を含めたエチオピア全土で100万ヘクタール(国土の10%)以上あるといわれている竹資源の有効活用にも興味があります。とかくコーヒーが脚光を浴びている本件ですが、生計向上に利用できる竹にも注目を集めようという下心を持って来ました。

プロジェクトを俯瞰すれば、開発調査→フェーズ1→フェーズ2という歴史を経てデザインが改善されながら、森林組合の結成・認証されたコーヒーの産出などの成果が今まさに目白押しに出てきています。この流れをそのままフォローしながら、“おいしいところどり”しているだけと、これまでプロジェクトに携わってきた諸先輩方に怒られないために、さらにおいしくなるようスパイスを加えながら業務に挑んで参りたいと思ひます。その際の味付けを間違わないよう是非皆様のご意見・ご批判を賜りたいと思ひます。どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。そして出来上がった料理(プロジェクトの最終成果)を皆様・カウンターパートや住民と愉しむことができれば幸いです。

(稲田徹 業務調整/参加型森林管理 専門家)

発行元:ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2 ニュースレターやプロジェクトへのご意見・ご感想もお待ちいたしております。

E-mail: belete-gera@ethionet.et (担当:稲田、吉倉)

URL: <http://project.jica.go.jp/ethiopia/0604584/>